

頑張れ！ヲ級ちゃん！！

マグロトロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

最前線に送られたヲ級ちゃんのお話。

ヲ級ちゃんは過酷な労働環境の深海棲艦として戦っていく…？

# 目次

EP-1	「人類の皆様へラジオ放送」	1
EP-2	「近況報告」	4
EP-3	「前線勤務」	9
EP-04	「敗北」	14
EP-05	「鎮守府」	20
EP-06	「理解」	26
EP-07	「進化の代償」	33
EP-08	「過去」	38
EP-09	「妖精さん」	43
EP-10	「ゲームの中でも大戦争」	49



## E P — 1 「人類の皆様へラジオ放送」

人類の皆さん、どうもヲ級です。今日は敵泊地周辺海域まで来ています。

姫様からの命令で攻め落としちやえ☆とか言われてますが戦力が圧倒的に足りません。

姫様は馬鹿ですか？敵の本拠地に攻め入る艦隊編成間違ってますんか？

攻めて鬼級くらい派遣してくれませんか？実質死ぬと言われてる気がするんですが改修に改修を重ねた重ねたえりいっつと、やる気マンマンなふらああぐしいいっつても編成しないってマジですか？改造した後期型くらい派遣してくれませんか？あくまでも本拠地周辺海域ですよ？バカですか？

こつちに尻尾振ってるイ級さん、私の艦装をライバル視しているヌ級さん、やる気はあるけど最近砲撃が当たらないリ級さん、同艦種の上位艦が増えてきてどう考えても焦ってるへ級さん、イ級さんに噛みつくハ級さん、それに私じゃ本拠地に攻め込んでも勝てる気がしません。

風の便りで聞きましたですが姫様搭載の16inch砲を優に超している装備があるらしいです。

そんなの直撃したら木っ端微塵です、痛いのが嫌いです。助けて欲しいです。

昨日は運良く撤退させられました。今日は多分無理でしょう。

あと姫様やめてください。鹵獲した艦娘を私達に送らないでください。それで狙われてるんです。

海上補給できるのは嬉しいんですが撤退させてくれないですか？休日は私達には与えられないんですか？

人類の皆さん、どうかブラック企業の深海を救ってください。給料払ってください。それに皆さん無口すぎませんか？私なんて話し方忘れて「ワツ……」しか話せなくなつた時期がありましたよ。

どうか……どうかお話ししてください、寂しくて死んでしまいます。

最近コンビニのバイトに行けてません。最前線に派遣されてしまったからもうシフトを入れる暇が無いんです。

欲しい物があつただけど買いにすら行けなそうです。お金ももう底を着きました。

最近ル級と連絡が取れません。彼女も最前線勤務でしたし否が応でも何かあつたのでは無いかと思ひ始めてしまいます。

地上襲撃部隊は姫様直轄なのに何故私達は放置気味なのでしょうか？

話は変わりますがお肉が食べたいです。最近魚ばかり食べていて飽きてきました。

私の艦隊は料理出来る人が誰も居ないんです。

生で食べるのは正直飽きてしまいました、港湾棲姫様の料理がまた食べたい。帰りたいです。

そう言えば新造艦プロジェクトが行われているらしいですね。なにやら魚雷や艦載機搭載型の戦艦や姫様クラスの軽巡洋艦、過去最大数艦載機を搭載した正規空母が中枢区域で建造されているらしいです。

私も旧型と呼ばれる時代が来たんでしょうか……。

……とりあえず暇なので放送をしていきます、深海棲艦量産型正規空母ヲ級より

## EP—2 「近況報告」

暇つぶしの人類へのラジオ放送も終わった事だ。

中枢区画の姫様に近況報告を行わなければならない。

無線を繋ぎ4051・25：つと。

「あーあー、こちらポイント1—4。応答せよ、こちらポイント1—4」

「はあーいこちら中枢区画よおー」

「ちよおつとうるさいかも知れないけど許してねヲ級ちゃん」

「戦艦棲姫様…新型の建造でしょうか？」

「そうそう、そろそろ新型の姫級を造つとかないとつて思っちゃつてえ。集積地棲姫資源担当の許

可は貰つてるから資材詰め込みまくりねえ」

「……どれだけの戦力増強をお考えで？」

「奪取された海域に作成された人類の泊地を壊滅させられる艦隊を3つ作る予定よお、

それは置いといてそつちの状況は？」

「現状ポイント1—1、イ級率いる駆逐艦隊の指示を待機。ポイント1—2及び1—3

からの連絡は途絶えております」



「…ちよおつと不味い状況かも知れないわねえ」

「それと休みください」

「……はい？」

「休日はこちらには一切有りません。休みが欲しいです」

「あー…最前線だからねえ、シフト組めないわ…」

「なら来週発売の超合神グランディア3の初回限定版を買っておいってくださいませんか？あれを買い逃すと色々不味いので」

「ええ？ちよー??？」

「超合神グランディア3です。遂に闇の総帥との決着がつくんですよ。次の給料から差し引いていいんでお願いします」

「給料足りないと思うん」「減額止めてください」

「……………」

「ここは譲れません」

「……はあわかったわ。買っておくわよ…だから早く人類側の拠点を潰して来なさい？私は貴方に期待してるのよお？」

「了解しました。出来れば増援の方もお願いできますか？現状の戦力では人類側の戦艦に手の打ちようが無いのですが」

「それについては問題ないわよお、Point5-5に配置して置いた「新造艦」のデータが得られたからねえ…そっちに2人送っとくわあ」

「例の航空戦艦でしょうか。港湾棲姫様曰くまだ暴走の危険性があると…」

「拘束艤装を装備させてあるから大丈夫よお…あまりにも艦娘のデータを混ぜ過ぎちゃったかしらねえ。彼処まで人格形成に支障が出るとは思わなかったわ…」

「危険性では私と比べたら何倍くらいでしょうか？」

「ヲ級ちゃんの方が私のお財布的に危険度が高いわよお」

「ノー問題です。私は痛くも痒くもございません」

「それは酷いわねえ」

「では搜索に戻ります、戦艦棲姫様もご無事で」

「了解よお、ヲ級ちゃんも慢心しないようにねえ…?」

「ありません。早く帰投し超合神グランディア3を攻略しないと行けないので」

「……そうある事を願うわ」

……よし、素晴らしい。

限定版超合神グランディア3の予約が済んだ、それに戦艦棲姫様が払ってくださるの

なら問題は無い。

深海税込37,860円。前作主人公の機体が使えてヒロインのフィギュア付きだからってこの値段は高い。

ましてや給料がバイト代より少ない私達にとつて手が届かないような代物だ。

それを無料で手に入れられたのだから勝ち組だろう、流石私。選ばれた正規空母おほ……!!

搜索は既に済んでいる、今日もマグロを食べて寝るだけのお仕事だ。いや飽きた。

イ級率いる駆逐艦隊からの連絡は一切届かない。ヌ級さんの索敵機の情報では戦艦2、空母2、駆逐2という馬鹿みたいな人類の艦隊を発見したらしい

最前線の中の最前線に派遣されたポイント11勢はもう……駄目だろう。

私の艦隊はひたすら無口だ、皆電波での会話が楽である為そちらを優先する。

だから戦艦棲姫様との連絡は生声で頼み込んだ。ゲームではボイスチャットは必須、深海棲艦が思っているよりコミュニケーションは大事なのだ。

ル級と「FIRE of blust」:FPSをやった時にはボイスチャット組が誰一人居なかった為連携が取れずぼろ負けした。

戦場でも同じ事、コミュニケーションが大事。もしかしたら平和の道も開けるかも知れないし……。

さて……明日はラジオ放送でもするか、この放送がル級に通じれば良いんだけどな

## E P — 3 「前線勤務」

数ヶ月前

ル「今日も私がMVPだ！凄いだろうヲ級！」

満面の笑みを浮かべる私の親友であるル級は調整した16inch三連装砲を振り回しこちらに向かつてくる。

鹵獲した艦娘との演習にて完全勝利を決めMVPを取ったル級は姫様から褒められたらしくいつもより心なしかキラキラしている気がした。

ル「そつちはどうだった？ヲ級ならパツと片づけられたんじゃ無いか？」

ヲ「ん、全然だよ、……手も足も出なかつた」

……私は姫様が鹵獲したらしい艦娘の正規空母に敗北した。

悪魔でも艦娘は私達深海棲艦の敵、反旗を翻さないように姫様特注の拘束具で思考パターンを書き換えているから問題はないらしいけど彼処まで強大な力を見せ付けられると戦慄する。

……私の艦載機は全て上空で破壊され制空権を奪取され、こちらは爆撃により中破。

そこからは一方的な戦いだつた、同じく演習艦隊に所属していたメンバーもすぐさま

戦闘続行不可。

姫様曰く「練度がまだ足りない」と言う事だ。

ル「そうか……だけど演習を続けければ勝てる様になるさ。その為に姫様は我々に演習をさせてくださるのだから」

ヲ「そうだけど……決めたよル級。私……」

ル「ん？」

ヲ「絶対攻め込まれない場所で海を守ろうと思うの」

ル「……は？」

ヲ「だって中枢区画は安全でしょ？ここにいれば間違いなく給料は貰えるし死ぬ事も無い！」

ル「……いやいや待て待て。お前海を守ります！なんて言ってたのに引きこもるって言うのか!？」

ヲ「うん。だって死にたく無いもん」

ル「いやいや死んでも復元で「それって本当に私なのかな」

ル「え」

ヲ「復元って事は前の身体は無くなっちゃうでしょ？それって本当に元の私なのかな？」

ル「そんな難しい事私にはわからないぞ…」

ヲ「とりあえず私は引きこもってバイトしてそこそこの生活をしていくの！Lチキ食べてお風呂入ってゲームして寝るの!!」

ル「駄々を捏ねるなヲ級…自信を無くしすぎだろう…」

だつて怖いもん。あんな化け物が沢山いる場所で戦いたく無いです。

単艦に負けるつて流石におかしく無い？ちゃんと頑張つてた筈なんだけどなあ

「…オツカレ様、ヲ級ちゃんにル級ちゃん」

ル「その声は港湾棲姫様!?!」

ル級が驚くのも無理はない。

港湾棲姫様…

私達深海棲艦の上位個体であり私達の上司である姫級の一人。

北方棲姫様の姉にして超大型深海棲艦だ。

一般深海棲艦である私達が簡単に会えるお方では無い。

ヲ「今日はハンバーグ食べたいです港湾棲姫様」

港「ハンバーグ…分かった、補給の方済ませちゃってね」

ヲ「もう済ませました」

港 「はいね……」

ヲ 「おながへりました」

港 「ちよ……ちよつとまつててね」

ル 「……どこで知り合ったんだヲ級」

ヲ 「中枢会議室」

ル 「……ええ」

ヲ 「さあ、ル級、食堂行こつ」

ル 「まあ……そうだな」

――中枢会議室――

戦艦 「ヲ級ちゃん、ル級ちゃん……最前線勤務にしてみない？」

離島 「わあ、それは捨て艦と言う事？ 貴方もエグイ事するのね……」

戦艦 「いやいや……そんな事しないわよ。改造適性がある娘の方が勝算はあるから」

空母 「改造適性？ そんな事をしてる暇があるなら私達姫級が攻めた方が早いでは無いか」



泊地「何を言っている空母棲姫、我々姫級が此処から動けない理由を忘れたか？」

空母「……中枢眠棲姫姫だろう？知ってるわよ」

泊地「彼女が破壊された時、我々深海棲艦は完全に機能を停止する」

泊地「その為に警護に付く姫級が必要なのだ。」

空母「だからって艦隊全員姫にしなくても良いじゃない、本拠地を攻め落とせばこつ

ちの物よ」

戦艦「その前に此処を攻め落とされたらおしまいよお？」

空母「チツ……」

離島「あつ、そろそろAdmiralさんとの約束があるから落ちるわ」

戦艦「またオンラインゲームう？楽しいのそれえ？」

離島「こんな何も得られない会議よりは何倍も楽しいわ」

## EP-04 「敗北」

又「(…南西より敵艦隊接近中。どうしますか?)」

警備をしていた又級さんから報告が入る。

ヲ「ヲヲツ!? ついに攻めてきた!?!」

この海域防衛についてから約1ヶ月、暇だからってラジオ放送もしたし姫様にゲームの予約してもらった。

やる事もなく最近には艦装であるヘッド君と会話していたくらいだ。戦闘の準備を一切していなかった。

間も無くポイント1-4 「南西諸島防衛線」は激戦区と化すだろう。

ヲ「いやいや無理無理! 艦載機の整備も一切してないもん!」

又「(もう遅いですよ、来ます!!)」

敵艦載機による先制爆撃。ああやばい!! 回避に徹するが弾幕が凄い!

ヲ「ヲオオオオオオ!!?!」

―制空権喪失―

T字戦

我が艦隊有利!!

頭の中に謎の文字が浮かび上がる。まるでゲームの様な表記だったが：何処が有利だと言うんだ。

今の先制爆撃でイ級さんが死んだ!! 享年1ヶ月、酷すぎ!!

まず初め、早さに定評のあるへ級さんが特攻する。ただし敵の駆逐艦に囲まれてボコボコにされて死亡しました。

は? タイマンが普通、寄つてたかつてリスクしたらゲームをしてくれる友達を失うよお…

はっ! 私分かりました! さてはこいつら友達居ないな!

……やられてしまった人たちはポイント1-5の潜水艦の方々が回収してくれます。サルベージするまで死んだものと同様です。……でも私は死にたくないな

ヲ「とりあえず撤退しましょう、勝てる気がしません!」

又「ヲ級様、何処へ逃げるのですか? 敵本拠地近海最終防衛ラインはここですよ?」  
そうでした、死にます。ル級助けて! まあああああ!!

……ん? そうだよ。ル級を呼べば来るかもしれない!

ヲ「思いっきり叫べばル級が来てくれるかも知れない、私! 叫びまーす!!」

ヲ「ヲオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

腹からありったけの声を上げル級を呼んでみた。

……反応がない、敗北して中枢区域に帰還したのだろうか

ヲ「ル級いないよお辛いよお」

又「もうダメだこの人」

ハ「いや待つてください！アイツら間違えなく怯みましたよ！行けます！叫びまくりましょう！」

ヲ「もう……喉痛い……」

ハ「ダメだこいつ」

リ「（もうダメだ！ここはもう持たない！）」

又「むうう……仕方ない、やられたらポイント2—4へ合流、その後に奴らを殲滅しこの防衛に戻ろう）」

リ「（そうですね。まあ最前線はいい経験になったのでは無いでしょうか）」

ハ「（沈んだらお終いの艦娘より気楽な仕事で良かったよ）」

皆敗北ムードだ。流石に艦載機を飛ばせなかったのがミスか

……ちゃんと整備しておけば良かったなあ

ハ「（じゃあ先、沈み<sup>落ちます</sup>ます。後で会いましょう！）」

敵艦の砲撃によりハ級さんが吹っ飛んでいく。大きな爆発を起こして沈んでいった。

ひえ、軽い感じで落ちるって言ってたけどド派手に爆発したんだけど

又「(…ヲ級様、次はきちんと整備しておいてくださいね)」

ヲ「ごめんなさい」

又級さんが爆発した。敵艦の放った艦攻による攻撃で燃料引火爆発のフルコンボだ  
どん。

えっ、深海棲艦って爆発すんの

リ「深海棲艦に栄光あれ！」オオゴエ

ヲ「!!」ビクッ

ああ怖い！死際に言う台詞じゃない!!

てかやばい、次は私の番!?!…まあ皆の反応を見る限り楽そうだし、試さないと始まらないか

「……………!!」

敵戦艦がこちらに手をかざし私に砲塔を向ける。

—— やっぱり死んでもこき使われる深海棲艦ってひどい仕事だよな

爆音と共に右手の皮膚が焼け落ちる。

……んん？とても痛い、皆の反応を見る限りなーんか楽そうだったけど？  
とてもじゃないけど楽にできる痛みではない。激痛が全身に走り嗚咽を零す。  
やっぱり私、死にたくないわ

ヲ「ヲヲツ！サレンダー！！私サレンダーするので生かしてくださいー！！」

「……………!？」

ヲ「痛いのでーす!!今のめっさ痛かったでーす！」

ヲ「これ以上辞めてくれると嬉しいでーす!!」

攻撃の手を緩めてくれた敵艦隊は私の手を掴むとそのまま敵本部へと連れ去られて  
しまったのでした…

私、大ピンチ？

12 / 25、フタフタマルマル2020

我ラ艦隊ノ奮戦ニヨリ深海棲艦正規空母「空母ヲ級」の鹵獲ニ成功。  
今後、深海棲艦ノ対策ニ役立つ情報ヲ吐カセルベシ

## EP—05 「鎮守府」

南1号作戦が成功し、鎮守府では鎮守府前海域の奪還が成功した祝杯が上げられていた。

提「良くやったぞお前達、海域奪還はお前達が居なくては行えなかった！」

提「上から支給される資材も増加するだろう：今日は飲め、好きなだけ食え！俺の奢りだ！」

歓声が湧き上がる。彼女達もこの戦いで士気が上がったのは事実であり、深海棲艦という存在への対応も分かり始めた。

奴らは真正正銘の「化け物」だ、加賀曰く死ぬ事を恐れず、仲間を失う事すら厭わないらしい。生物として大切な部分が欠如していると言っても過言では無い。

俺は恐ろしかった、数多の命をいとも簡単に葬って来た化け物と彼女達を戦わせる事が。

誰かを失ってしまうんじゃないかってずっと恐れてたんだ、それでも彼女達はやってくれた、帰ってきてくれた。

深海棲艦と戦う事になるなんて俺が提督業を始める前、妖精が見えると発覚しスカウ



トされるまで思いもなかった。

ここまで来れたのは、間違えなく彼女達のお陰だろう。だからこそこれからも俺は進まなきやならない、もう怖気付いてなんて居られないんだ

加「提督、今よろしいですか？」

提「ああ、問題無いが……どうしたんだ？」

加「少しお話が。工場までお越し頂けますでしょうか？」

一人食事を終えた加賀が真剣な表情でこちらに問いかける、次海域奪還作戦の事だろうか。

……いや、入渠も済ませず、事務処理を行っていた彼女の言葉に何かが引っかかる。それに、無料で飲み食い出来るというのに彼女の食補給量量はいつもより心無しか少なく見えた。

……自分よりも優先しないと行けない事があったのだろうか。

#### ◆工場

ヲ「ヲツヲ!!ヲーヲー!!」ガタガタ

提「なんだ……これは？」

可憐な少女の様に見えるソレには頭部に大きく、禍々しい化け物の様なものが被さつ

ており、発せられる言葉は人間や艦娘とは大きく異なり、ノイズが混じり聞き取れない様な異音。

その目は赤く染まり、人知を超えた者だと言う事が俺でも良くわかる。

鎖で椅子に拘束されたそれは必死に鎖を解こうともがいているが加賀がキツク閉めたのだろうか。解ける様子は無い。

加「深海棲艦：〃正規空母〃ヲ級です。本日の作戦で無力化、鹵獲しました」

提「これが、深海棲艦：？」ビクッ

俺が知っている深海棲艦は鋼で出来た大きな魚の様な化け物だった筈だ。

確かに頭部に接続されている黒い化け物にはかつて見た魚のような意匠が施されているがその下の体は艦娘と言われても驚かないほど、精巧で美麗な容姿をしている。

ヲ「ヲヲツ！ヲツヲー！」エッヘン

明「……空母ヲ級のデータ収集をしていましたが、驚く結果ばかりで正直ゾツとしていますよ」

明石曰くヲ級の解析で得たデータは今までの深海棲艦理論を大きく覆す物だったらしい。

それは艦娘や深海棲艦、それに妖精という存在に対しての答えとまでは行かないが、ヒントになる様な。

提「俺は見た目だけでビビっちゃったけどなあ」

加「…私も驚いています、攻撃もせず降伏する深海棲艦は初めて見ましたから」

ヲ「ヲヲツヲ!!?ヲヲヲ!!?ヲーヲヲツ!!」

提「深海棲艦とは死んでも我々を滅ぼそうとする存在じゃ無いのか?」

加「…私もそう思っていました、しかしこのヲ級は一度も攻撃せず、降伏してきたんです」

加「…もしかすると我々の認識は甘かったのかも知れません」

提「……というかコレはどうするんだ?解体処分?」スパナ

ヲ「ヲヲツ!!」ビクツ

明「それがですね提督、加賀さんに連れてきて貰った理由にも繋がるんですが……」

明「大本営からの通達です。『空母ヲ級より深海棲艦の情報をも可能な限り引き出せ』との事ですよ」

提「………は?」

いやいや無理無理。

深海棲艦から情報を引き出せ、いやどうやって?言語も通じない相手からどうやって聞き出すんだ?

それに加賀曰く正規空母。目の前で艦載機を発艦されたら蜂の巣確定だ。

明「提督、ご安心を。そんな時の為に開発しておきました！その名も翻訳メーカー！」  
 デーン!!?」

明「ある艦娘が動物とお話したいって言ってたのを聞いて制作してた機械のプロトタイプです！ちようど二つあるのでコレを提督とヲ級に装着すれば会話が出来ますよ！」

提「いや艦載機の心配は拭えてないんですけど」（震え）

加「ご安心を、ヲ級の頭部のカタパルトの奥で4機の艦攻が錆びて固まっています。それに私が居ます、不審な行動が見受けられましたらすぐにヲ級の活動を停止させますので」

明「いやあ活動停止させちゃうと怒られそうだけどね…」

心配事は多いが覚悟を決めなければならない様だ。

皆も頑張ってくれたんだ、俺も頑張らないと行けないからな…

提「装着！」スチャ

ヲ「ヲツヲー！ヲヲツ！」スチャ

加賀と明石は息を飲む。

もしかしたら大きく戦況が変わる様な情報を提督が得られるかもしれない。

そんな期待を胸に秘め、提督である彼が動くまでその緊張は続いた。

……その流れを変えたのは提督の言葉だった。

提「……こいつ、マジで深海棲艦なの？」

## EP—06 「理解」

提「…ああ聞こえるか？」

ヲ「ヲツ…聞こえてますよ」

こいつが深海棲艦「正規空母ヲ級」。頭部で居眠りをする様に目の様な機関を動かす艀装以外は艦娘と何ら変わらないような娘が、人類を脅かし続けてきた深海棲艦なのだ。

会話してみてわかった。敵の本拠地で身体の自由を奪われた上、敵に矢を構えられいっつ死んでもおかしくない状況なのにも関わらずヲ級女は冷静だ。

それが不気味で、深海棲艦と言う存在に対する恐怖感が積み重なる。

提「単刀直入に言う、貴様らの目的は何なのだ？」

ヲ「お腹が減りました」

提「は？」

ヲ「ご飯あります？ 今日何も食べてないんですよ」ヲツヲ

提「いや質「お腹が減りました」

…駄目だ、これが深海棲艦？ただ飯を要求する謎の存在じゃないか

それともこれが必死の抵抗なのか？飯を取りに行っている間に逃げ出そうと言うそう言う計画なのか？

提「…こいつ、本当に深海棲艦なのか…？」ボソツ

加「ええ、間違えなく深海棲艦よ…」

明「深海棲艦には、人間や艦娘には存在しない身体の構成物質が存在します。見た目こそ艦娘に近しいですがその性質は駆逐イ級などの個体と同じ、何ら変わりありませんよ」

…そうは見えない、恐るべき存在を前にしている筈なのに不思議と恐怖感を感じないのだ。

まあ飯を求めているだけだからか…？

提「…おにぎりならあるぞ」スツ

ヲ「ありがとうございます」シユバツ

目にも留まらぬ速度で頭部の化け物の触手で俺の手の中にあつたおにぎりが奪われる。

拘束をしていなかった頭部から伸びている

交渉材料にもさせないつもりか…流星は深海棲艦だ、油断はできない。

ヲ「!!」パアア

……美味しかったらしい、気に入ってくれて何よりだ。

ヲ「ご飯のお礼です、なんでも答えますよ」エツヘン

提「いや……お前はそれでいいのか？」

ヲ「何がですか？ご飯の恩は命と同格でしょう？通信装置は切つてますしなんでも話  
せますよ？」キョトン

提「……まあ良いなら良いんだけどさ」タメイキ

……仲間を裏切るって考えてなかったのかなあ。

提「……じゃあ、深海棲艦の目的についてだが」

ヲ「ごめん知らない、姫様達曰く全世界の制海権を奪取してから何かをするらしいけどその何かを教えてもらってないよ」

提「本当か？実は知っているんじゃないのか？」

ヲ「じゃあ……んっ、ヲヲヲヲ………これでいいかな？あーあー」

ヲ「ちよいとそこのお姉さん、嘘発見器みたいの無いかな？」

明「っ?!こんな短時間で言葉を理解したんですか!？」

ヲ「ん、大丈夫みたいだね、じゃあこれは返す。取ってくれると助かるな」

……ヲ級が言語を理解した、それもこんな短時間なのだ。

深海棲艦の学習能力なのか、それともヲ級コイツが異常なのだろうか。



明石がヲ級に装着されていた翻訳メーカーを取り外し、小型の嘘発見器を持ってくる。

ヲ「ありがとう、じゃあ……深海棲艦の目的については何も知らない、いいね？」

嘘発見器「ブツブー」

ブザーが鳴る。これは嘘をついた時に鳴る音だ。

提「は？」

ヲ「あつ」

加「…」

明「あーあ」

提「知ってるんだな？」

ヲ「ヲツヲ…人間用なら騙せると思ったのに」

提「騙す気まんまんじゃねえか、恩とか何処いったし」

ヲ「敗北しました」



ううう…上手く騙して適当に切り抜けようとしたけど駄目だった。

いや怖いもん、なんで男の人の後ろにいる艦娘、ずっと私に矢を向けてるの？

「フ級さん」もずっと居眠りしてるし、艦載機は飛ばせない。腕を動かそうとしても鎖でがんじがらめにされていてどうにもならない。

提「じゃあ話してもらおうぞ？お前達の目的はなんだ？」

フ「フワツ……」

言っついていいのか？無線は切つてあるが空母水鬼様の様に遠隔監視をされているかも  
しれない。

……いや死ぬよりはマシか？……いや、もう一つ逃げ道があるか。

フ「……お魚」

提「……は？魚？」

フ「お魚を独占するの」

嘘発見器「………」

明「嘘発見器に異常は見当たりませんが……それって本当なんですか？」

フ「ん。美味しいじゃん」

加「……それには同意するわ」

切り抜けられた!!漁業権剥奪は我らの悲願!!

秋刀魚とか美味しいもんね、仕方ないもんね。これなら許されるよ絶対。

フ「他には？」

提「お前達の指揮官は居るのか？居るとすれば何処にいる？」

ヲ「中枢区域、姫様の事でしょ？」

嘘発見器「……………」

そうらしい、反応しなかったし。

そういや戦艦棲姫様はグランディア3買ってくれてるだろうか。

提「中枢区域とはなんだ？」

ヲ「私達が生まれる場所、深海棲艦の始まりにして終わり。全ての終着点」

提「うむ…難しいな、場所は何処に位置する？」

ヲ「中枢区域は中枢区域でしょ、それ以外ある？」

嘘発見器「……………」

提「やはり駄目か…」

んん？中枢区域は中枢区域では？

他の呼び名は聞いた事ないから知りません

提「じゃあ質問を変えよう、その頭部の奴はなんだ？」

ヲ「ヲ級さんだよ」

提「…ん？お前がヲ級じゃないのか？」指差し

ヲ「私はヲ級だけどこの人もヲ級さんだよ」

ヲ「最近は何も居眠りばかりかしてるからコミュニケーション取ってないんだけどね」

ヲ「……そろそろ解いてくれない？痛いんだけど」

提「駄目だ、お前に逃げられては困るんでな」

ヲ「ヲツフ。じゃあ毎日ご飯だけは持つてきてね」

提「呑気だな……お前」

ヲ「……あと出来ればパソコンを貸して欲しい」

提「パソコン？何に使うんだ？」

ヲ「……オンラインゲーム、「FIRE of blust」ってやつ」

提「……それ俺やってるわ」

ヲ「……まじで？」

ヲ「……出来れば良いんだけどさ、今度マルチしない？」

提「……いいぞ」

ヲ「やった」

この日、提督とヲ級の中には謎の信頼感が生まれた。

思想は違えど娯楽は同じ、ゲームは世界を繋ぐ、ハッキリわかんかね。

## EP—07 「進化の代償」

ル「何でだ…何故勝てない…!!」

自分自身の力を過大評価していた、他のル級とは違うと思いついて込んだ。

最前線のポイント1—3の防衛任務に就けたのにも関わらず、私は艦娘に敗北した。

無様な物だ、演習ではあれほど痛ぶった駆逐艦に止めを刺され我々深海棲艦はポイント1—3の制海権を失った。

全ては無力な私のせいだ、戦艦棲姫様は私を責める事はしなかったがどれだけ私の失態が深海に大打撃を与えたか。

ル「これでは…ヲ級に顔向け出来ないな」

吹き飛んだ身体は再生<sup>サルベージ</sup>され、鍛えた力を失う。ただし経験は練度<sup>レベル</sup>として受け継がれていく。

練度<sup>レベル</sup>が一定に辿り着いたとき、深海棲艦の中でも一部だがその先に進めると言われているがただし大きな代償を支払う…と聞いたことがあった。

もしかすると、この私でも先に進めるかも知れない。そうすれば私に屈辱を味合わせた艦娘に絶望を味合わせることが出来る。

離島「…で私の所に訪ねて来た」とカタカタカタ

布団にうつ伏せになり、キーボードとマウスでゲームをしている少女…この方こそが量産型深海棲艦の原型製作にも携わっており、最終防衛ラインであるポイント6-4の総司令官でもある深海棲艦幹部、離島棲鬼様である。

良くヲ級とプレイしていたガンゲー…「FIRE of blast」をプレイしているらしいが、手の動きが意味不明だ。ヲ級のプレイも目で追えない程の速さで、ついて行けなかったが離島棲姫様の動きはヲ級とは比べ物にならない。私はゲームを良く理解できなかったが上位に食い込める程の動きなのではないか？

離島「よし、勝利つと…38キル、まあまあね」

離島「貴方分かってる？ “進化”には代償が必要になるのよ？」

ル「分かっております、それでも私は強くならねばならないのです！」

離島「はあ…それは分かってない奴の台詞だわ、進化する時に必要になる代償は大きく分けて3つ」

ル「3つ…」

離島「ほら見なさい、分かっているなかったじゃない」

ル「申し訳ありません…」

離島「知らないでこの処理を行なうと戦艦棲姫の奴がうるさいのよ！人道に反するだ

とか何とかで長つたらしい説教をされるわ！」

離島「…ごほん、まあいいわ。それじゃあ一つ目の代償…今までの練度<sup>レベル</sup>を失う事になるわ」

…鍛え直せ、という事だろう。

だが経験が練度となる、ならばそれを失うというのは…

離島「次に2つ目、強化艦装を定着させる為に深海細胞による身体の侵食率を増加させるわ。…これに関しては正直問題はないわね。目から光がでたりする程度よ」

姫様達も赤い光の様なモノを放っていた、つまり姫様達は深海細胞との同化率が高いのだろうか。

離島「最後に3つ目、1の延長戦になるんだけど…」

離島「…練度を媒介として強化する為、記憶を失う可能性があるわ」

ル「記憶を…失う？」

離島「この処理は実は身近に行なわれているのよ？…急な環境な変化に耐えきれない子が増えて来てしまったから新造艦には全てこの処理を施した事があるわ」

離島「勿論貴方にも、そして君のお友達も、ヲ級にも」

……………。

離島「生活には支障が無いでしょう？ほおらなんの問題も無いわ」

ル「…失った記憶って戻らないんですか？」

離島「一般的には…ね、ひよんなことから戻ってしまう子も居たわ」

離島「私的には失った記憶は取り戻して欲しくないわ、取り戻した子の半数は”使い物にならなくなったから”」

離島「さてル級、君には記憶を失ってでも力を手に入れたいかい？」

離島棲鬼様がケタケタと気味の悪い声で笑う。

記憶を失う、つまりヲ級達と過ごした思い出が全て、無くなってしまいかも知れない訳だ。

私はそれに耐えられる自信がない、友を失ってまで得る力は本当に必要なのか？

ル「私は……………」

離島「そうだろうね、君ならそうくると思ってたわ」

離島「なら賭けて見ましようか、君の可能性って奴に…」



その日中樞区域では一件の進化改修が行われたらしい、そして生まれた深海棲艦は同じ名を冠した艦とは大きく戦闘能力が向上し、艦娘に対抗する手段を手に入れた。

それが“彼女”の求めていた答え、ただし『例外』という者はこの世界に付き物だ。失う筈のものを失う事もなく、力を手に入れる事があるのかもしれない

## EP—08 「過去」

戦艦「…ヲ級ちゃんが帰って来ないのお？」

又「はい、先に我々がやられてしまったので見ては居ませんがあの攻撃です。間違えなく回収も済ませていると思います…」

戦艦「潜水哨戒部隊、どうだったかしらあ？」

カ「個体〃空母ヲ級〃未確認です。2200まで潜伏、フタフタマルマル索敵を行いましたフタフタマルマルが信号すら確認出来ませんでした」

潜水「それに…戦艦棲姫…いちいち私の部隊を…使わないで貰えるかしら」

潜水棲姫は戦艦棲姫の独断で自身の艦隊を動かされる事を心良く思っていなかった。

実際何度も沈められ、帰還する者が居たからであり、艦隊運用も出来ない奴に幹部を名乗って欲しくないのが事実だった。

戦艦「ごめんなさあい、潜水棲姫い…貴方の艦隊が一番練度が高いから安全なのよお」

戦艦「しっかし…困ったわあ、ヲ級被ちゃん女を失う訳にはいかないのにい…」

潜水「…? あんな量産型…代わりは沢山…あるじゃないの」

戦艦「それがあの子お、どちらかと言ったら量産型じゃなくて私達被に近い存在なのよ

ねえ」

潜水「…は？、何を言ってるんだお前は…」

戦艦「あの子が深海に落ちて来た時適正チエックをしたのよお、結果はなんと『姫適正』持ち。しかも私の10倍以上のポテンシャルを秘めているみたいでねえ」

戦艦「もしかしたら眠り姫中樞棲姫すらも超える化け物になったかも知れないのに…」

戦艦「私、すっごい期待してたのよお、そうしたらあの子すっごい暴れちゃってえ…」

潜水「眠り姫中樞棲姫を殺されかけた…あれか」

かつてヲ級ちゃんの前世は深海棲艦を脅かす悪魔のような存在だった。

ある日ヲ級ちゃんがミスをし、その隙を狙った姫級の攻撃でやつと沈められたのだ。

彼女を沈める為の犠牲は3万を超える、復活できるからとは言え仲間が殺されるのは快いものではない。

戦艦「そうそう。そんな子を止める事もできないからあ、ヲ級さんを強制連結させて『記憶の全体消去』をおこなったのよお…全部離島棲鬼の独断だけどねえ」

潜水「…離島棲鬼の判断は…：…間違っではないと思うけどね」

離島棲鬼は暴れるヲ級に無理やり艦装を連結させる事によりその記憶を破壊した。

戦闘経験も、かつて深海棲艦を屠って来た記憶も、仲間達との思い出も。全てを失っ

たヲ級はこうして深海棲艦へ着任した。

戦艦「その通りよお。あの判断が無ければ私達全滅も有り得たんだから感謝はしてるわあ、ただ倫理観つてものがあってねえ」

潜水「我らにそれを求める：貴様がお人好し過ぎるだけだ：愚かね」

戦艦「むう、そこまで言わなくても良くないかしらあ？」

又「では、如何致しましょうか」

戦艦「もし死んで轟いたと沈したら信号は残る筈、艦娘があれを遮断する手段は無いわあ。となればそれを遮断できるのはヲ級ちゃんのみ…」

戦艦「彼女は生存して、何処かに居るはずよお。総員ヲ級ちゃんの回収に向かいなさい？」

又「了解致しました、しかし我らだけではあの艦隊に勝てる気がしないのですが…」

戦艦「それなら問題無いわよお、ヲ級ちゃんの穴を埋められるくらい強い子が進生まれたたの、貴方達の旗艦として配属させるわあ」

戦艦「さて、紹介するわねえ。〃 戦艦ル級〃よ。」

左目から放たれる蒼の光、右目は元の姿と同様に赤く染まっている。

離島棲鬼が施した進化はとてつもない結果を生んだ、ル級自身の練度が限界値を超越していた事も含めて恐ろしい程の深海細胞による侵食が行われた。

そして生まれたのは今までに前例の無い“ル級改flagship”。その火力は戦艦棲姫を凌駕し量産型と言う範疇を大きく超越していたのだった。

ル「：よろしくお願いします」

ル「ヲ級：待っている。必ず、この私が探し出してやる」

：ル級は深海細胞に侵食されながらも、ヲ級を忘れる事が無かった。

ル級にとってヲ級は唯一の親友であり、心を許せる者だった、だからこそ辛かったのだ。

彼女は薄々気づいていた、ヲ級と自分には大き過ぎる差がある、それは才能。

決して埋める事が出来ない才能の差はル級の心を大きく歪めてしまうのかも知れない。

だけど彼女は折れる事も無くやってみせた、誰も辿り着いた事のない場所まで努力だけで辿り着いた、才能の差があろうとも、努力は才能を上回る事もある。

ヲ級が天才なら、ル級は秀才なのだろう。

◆  
離島棲鬼はそれを知っていた。強くなる為に、努力していた事を。

離島棲鬼は“そう言う事例”を一度だけ見た事がある。努力しても埋められない大

きな差がある事も知っていた。

だからこそ真剣なル級を離島棲鬼は『例外』として彼女を改造したのだ。

かつての「ソレ」とル級を重ねてしまった、離島棲鬼なりの償いなのかも知れない。

それでも、定着するかは彼女<sup>ル級</sup>次第だった。

他の姫がどう言う評価を下すかは誰も知らない。だが離島棲鬼はル級かヲ級かと聞かれたのなら間違えなく、ル級を選ぶのだろう。

離島「そうか、もう出撃するのね」

離島「…貴方なら何でも出来るだろうね、だって」

離島「〃かつての私が、〃なし得なかった事を、なし得たんだ」

離島「居場所を捨てる事も無く、友を守る為に」

一人、そう呟く彼女の瞳に涙が溢れていた。

## EP—09 「妖精さん」

妖「深海棲艦さん、お暇ですか？」

ヲ「…誰？」

手のひらに乗りそうな程小さな少女が床から私を見上げている。

艦娘はこんな珍妙な生物まで飼っているのか？

妖「一般妖精さんです！」

ヲ「ヲオ…っては？妖精？」

妖「そうです、伝説の妖精さんですよ！」

妖精、ゲームや本の中だけの存在だと思っていたのだが。

本やゲームで良く目にするような羽が生えた姿は無く、艦娘を小さくしたような感じ

の妖精は小さい鉄の塊をこちらに差し出してくる。

妖「深海棲艦さんって空母ですよね？…すっごい艦載機を作って欲しいのです!!」

な、なんだってー。敵に自分達の兵器を作らせるのか…（困惑）

ヲ「…いいよ、作ってあげるけど資材はどれだけ使っていいの？」

妖「999／999／999／999／999までならオツケーです！お願いします！」

ヲ「私の補給量より多くない？」

妖「その分すつごいのを作つて欲しいんです！お願いします！」

：すつごいのつて言われても深海棲艦こつちと艦娘そつちじゃ規格も違うだろうしなあ

皆御馴染みのたこ猫や艦き爆でも作れば許されるかなあ。

ヲ「じゃあ10／60／200／666だけ頂戴」

妖「それだけで大丈夫ですか？」

ヲ「しようがねえな全部使つてやるよ（迫真）」

妖「そうですね！」

嵌められた気がするが置いておこう。

実際こんな資材を使った開発を行った事がないので何が出来るか本当にわからない。

なんなら最新型を開発できても空母棲姫様そつちに持つて行かれてしまうから使つた事も

ないし性能は知らないのだが

ポーキサイトに接着剤を垂らし燃料を上から大雑把にぶち撒ける。鋼材を突き刺し

たら弾薬を添えて火で炙る。

後は寝ているヲ級さんの口の中に入れて完成だ。

ヲ「でけた……ん？」

赤い光を放つ6つの目、歪な歯が不揃いに生えており黒い液体を垂れ流している。



見た事の無い謎の艦載機だ。艦攻なのか艦爆なのか艦戦なのか判断すら出来ない。

ヲ「新型出来てしまった」

妖「凄いです！見た事の無い艦爆ですわね！」

ヲ「へ？これ艦爆なの？」

妖「どう見ても艦爆じゃないですか？」

どうやら妖精は判別能力も備えているらしい。深海棲艦側にも欲しいくらいだ。

いやもうひよこ鑑定見たいな事はしたくないじゃん、しかも給料出ないからね？

妖「ありがとうございます！これで皆に迷惑をかけずにすみませよ！」

ヲ「…迷惑？」

妖「そうなんですよ、私戦場じゃ何にも活躍出来てなくて。それで抜け出して来てし

まったんですが…」

ヲ「機体の性能が悪いの？」

妖「いいえ…私は怖いんです。戦うのが」

ヲ「私と一緒にじゃん」

妖「深海棲艦さんも…怖いんですか？」

ヲ「正式には死ぬのがね。生き返れるって聞いても実感湧かないし、それが本当に今

の私なのかはわからないじゃん」

ヲ「だから私は死にたくないの」

妖「なんかズレてる気もしますが…死ぬのは怖いですよね」

ヲ「死なないで遊べる演習とかなら大歓迎なんだけどねえ」ヤレヤレ

コンコンツ

加「失礼するわ、ヲ級。提督から預かってきたものを持って来たのだけれど……つて妖精さん貴方こんな所で何をしているの？」

ヲ「ヲヲツ、マジで持って来てくれるとは!!」

パソコンとゲーミングマウス、それに…安物っぽいけどキーボードか。

十分だ、後はプレイングでどうにかなる。ネット回線はチェック済みだしね

妖「えっと…あの…艦載機を作って貰ったんです」

加「……深海棲艦は敵ですよ。何をしているんですか」

妖「…ごめんなさい」

ヲ「えっと、加賀って言ったっけ？この子戦いたく無いんだと」

妖「!!…いえ、そんな「無理をさせるのはどうかと思うけどねえ私は」

加「……この子が無理をしているって言うの？」

ヲ「こんな所に一人でいる時点でそうでしょ。上でドンパチしてるのが聞こえてたし今まで演習してたんでしょ」

加「…その通りです」

ヲ「ね、練習試合とは言えここで一人だけいるのっておかしいじゃん？」

加「……………」

ヲ「確かに早く決着をつけたらいいのは分かるけどあんまり無理をさせるのは行けないよ。ちゃんと意見くらい聞いてあげなよね」

加「…そうね、確かにその通りです」

加「それでも私達は深海<sup>貴</sup>棲艦<sup>達</sup>を倒すまで、戦争を終わらせる事は出来ないのよ」

ヲ「戦争なんてしなければ良いのにね、ゲームだけで十分だよ」

加「…それでも貴方達は海を占領するでしょう？だから戦争は終わらないのよ」

ヲ「皆仲良く出来ればいいんだけどねえ」

加「…それでは私は失礼します」

ヲ「帰るの？」

加「…ええ、まだ書類整理も終わっていませんから。」

加「それと…妖精<sup>貴</sup>さん<sup>方</sup>が苦しんでいた事、気づいてあげられなくて申し訳ありません。」

妖「いえ！私が悪いんです！」

加「…少しくらい休みも、必要見たいですね」

加「ヲ級、明日はどうせ暇でしょう。少し付き合っただけでいいのですが」

ヲ「ん、いいよ。縛られてるの嫌だし」

加「…ありがとうございます。それでは」

妖精は加賀について行ってしまったからまあ一人ぼっちに戻ってしまった。

…明日はようやく外出が出来そうだ。こんな熱苦しい所に居なくなかったから丁度良い。

…さて、ゲームをするか

# EP-10 「ゲームの中でも大戦争」

…よし、十分機能する。

スペックはいつも使ってる物よりも劣ってる見ただけでプレイングで補うのがプロと言う者だ。

ゲーミングマウスがあるだけマシ、設定も完了したしクインテッドに潜っていいからか。

アカウント選択：パスコードはRainw01022931。

レイン、赤目白髪シヨートに黒いマフラーを巻き姫様のような制服を着用した私のアバター、数多の戦場で数々の傭兵を葬ってきた最強のスナイパー。

この「FIRE of blust」の中にはプレイヤー同士が自由に話し合える掲示板が存在する。上位ランキングにも名を馳せる私はどうやらファンも多いらしい。

ヲ「…実況しますか」

ヲ級さんの口内にしまつてあつた録画装置をパソコンに接続する、編集装置は無いため生放送しか出来ないが問題ないだろう。

「FIRE of blust」内での配信は配信コーナーから確認できる。ランキング

グの高い者が配信していると優先的に上に来る様になってるのでランキング28位の私が配信したら10万人は集まる。別ゲームは動画サイトでやってしまうんだが「FIRE of blust」は違う、なんと中で配信すれば投げ銭ならぬ投げアイテムが貰える事もある。

この為だけに配信する乞食プレイヤーも多いらしい：

ヲ「さて、レインの実況始めるよ、一緒に戦いたい人は下のコードを入力してね！」  
ポンポンと配信コメントが増えていく。

ジグ「俺が先だ！」

城高「マツテマシター!!」

冷凍庫@赤騎士団「レインさんクラン入りませんか？」

テトラ@白の十字架「参加したいです」

浩也「ぼくも入れて」

ゴルデイス@ゲリパンツ「レインちゃん頑張れ\*アイテムが贈られました+THA  
|920」

パラレル#極光@極騎士道「今日もスナイパーですか？」

セイン「レインはスナイパー使いだぞエアプ」

ゼスタ@絶対無課金同盟「rittoさんも配信してるからどっち見れば良いんだ」

こんな感じですぐに更新される、戦いたく無い相手の名前が出ているが気にしては行けない。

ヲ「ゴルデイスさん武器ありがとです、じゃあ始めますね」  
マツチングスタートだ。

こつちのメンバーは：私含む遠距離2人、グレネード厨1人、近接1、支援1。

バランスは最高レベルだ。全員近距離が相手だと面倒臭いのだが今は中距離が流行っているし問題ないだろう…

「マツチングシマシタ」

ヲ「対戦よろしくお願ひします。……………ツツ！」

表示された戦闘相手のHハンドルネームNは：「ritto」「草彘#弁当同盟」「白牙」「ベース#団

長@烈風団」「零海」。

「ritto」、ランキング8位のプレイヤーであり：離島棲鬼様のアバターだ。

離島棲鬼様はいつも決まったメンバーでバトルに行っている、何度も配信を見たからわかるが動きが異次元過ぎる、3人ガトリング相手に被弾0で全キルとか意味不明。近接特化プレイヤーの中では最高順位であり、近接最強とか呼ばれていた筈だ。

…でも白牙なんてプレイヤー見たことないんだけどなあ。まさかとは思うけど姫様の誰かだったりして。

バンギ>「近接最強vs雨のスナイパーキター!!!」

冷凍庫@赤騎士団>「神試合k t k r」

刃牙さん>「急上昇で草」

麵屋#ラーメン>「急に視聴者増えたww」

カッターマン@アラベル>「ritoってアサルト二丁だっけ」

レイザー>「おまけみたいにベースいるの笑う」

紅蓮の炎>「初期武器でなんであんな強いんだろうな」

grand>「ritoのつてマガジン増加射撃分散軽減だっけか」

カッターマン>「AKの方が確かそれでM4の方が即時弾倉交換横軸補正」

テトラ@白の十字架>「レインちゃんキツくないかなスナイパー相性悪いよ」

レイザー>「近づかれる前にヘッドショットしか無いでしょ」

ヲ「頑張ります、皆さんよろしくです！」

さて：どうしたもののか。始まった瞬間にritoをキルしたいがベースがスナイパー使いだ。迂闊に顔を出したら即死だろう。

「<バトルスタート>」

近接スナイパーとか言う禁止手はあるがそれでは間違えなく死ぬだろう。

バトル開始のゴングが鳴る。



やはりrittoと草薙は建造物を盾にしながら突っ込んでくる。

裏でベースと零海がスナイパーで援護射撃…完璧なフォーメーションだとつくづく思う。

grand>「もう壊滅しかけてるんですがそれは」

冷蔵庫@赤騎士団>「残り2人じゃん」

カッターマン>「rittoおかしいなやつぱり」

紅蓮の炎>「一人動いていないプレイヤーいてこれは強すぎないか」

テトラ@白の十字架>「編成は良かったんですけどね…」

浩也>「よわ」

Admiral>「あれ？」

麵屋#ラーメン>「兄貴！」

刃牙さん>「Admiral兄貴居て草www」

ジグ>「rittoさんに誘われてなかったんだww」

バンギ>「草に草生やすな」

ゼスタ@無課金同盟>「Admiral兄貴レイン側参加くる？」

コメント欄が凄く盛り上がっているが気にしない。

残りプレイヤーは私とセインのみだ、私のスキル編成は一撃火力重視の単発砂。セイ

ンは近接特化のサブマシンガン。

私だけではベースと零海二人を落とす事は難しいだろう。セインも同じく r i t o と草薙を止められるとは思わない。

ヲ「特攻しか…ないか」ボソツ

対物ライフルからハンドガンに武装を切り替え、セインの元に合流しよう。

やはり重量ペナルティの關係上スナイパー使いのサブウエポンがハンドガンやナイフになるのは少々キツイものがある。

ヲ「詰めます」

先に出て来たのは草薙だ。変態型火力フル特化3点バーストを叩き込まれる前にスライディング。

私がハンドガンで背後から一発。砂の角度から考えて三発打っている余裕はなかったがセインがシツカリとキルを取る。

スナイパーのハンドガンは火力補正がかかり、防御補正を掛けていないプレイヤーに対して三発でキルする事ができるのだ。

セインのウエポンが弾速の速いサブマシンガンだったのが良かった。

火力と起動性能に全振りの草薙と r i t o は防御に一切能力値を振っていないのは知っている。

ベースは防衛特化の支援型、ハンドガンでキルするなら6発必要になる。零海に関しては私と極めて近い能力値振りをしている為防衛を削っているだろう。

ヲ「rittoが居ない…?」

草薙と行動を共にしていた筈のrittoを見失った。

幾ら軌道重視の速度全振りだと言ってもジャミングやスモークと言った視界妨害を使われていない状態で見失うわけがない。

おそらくまだ近くにいる、離島棲鬼様のアバターであるrittoは足跡消音を付けていない。ミニマップに表示される足跡を辿れば…!

ヲ「ビング、140の方向!」

背中を向けていたrittoをキル…

だがドロップした装備は私のスナイパーよりも一回り大きいsdw…

ヲ「零海をキルした…!」

【ritto>[checkmate]】

ゲーム内チャット…!?いや交戦中に打てるってどうなってるんだ!

それに背後に来たのが一切気付けなかった!!零海は囧…?

セインが応戦するがrittoに一切のダメージを与えられない。

弾を全て回避している…?幾ら速度特化にしてもそんな芸当出来てたまるか。

ヲ「負けてたまるかッ！」

アビリティはもう何も残っていない。ただ10発残ったこのハンドガンだけでrittoを倒すしか無い。

でも私は大事な事を忘れていた、rittoに気を取られベースの存在を忘れていた。

「Your Dead」

ヲ「ヲヲッ!？」

「貴方のチームは敗北しました」

ヘッドショットで即死、rittoにセインがやられチームは敗北：

いやいや強すぎない？流石に無理です。

離島棲鬼様の手の動きは一体どうなって居るんだろうか。

「再戦募集が届いています」

セイン「すみません足引っ張りしました」

麵屋#ラーメン「他三人がゴミだったからセイン頑張った方じゃね」

浩也「※※」規制ワードが含まれています」

テトラ@白の十字架「お子様は帰りましょうねwwww」

刃牙さん「まあ受けても良いとは思うけどメンバ―変えたほうがいいな」

バンギ「Admiralニキ入ってくれと嬉しいなあ」

Admiral>「少し気になる事が」

刃牙さん>「ん？」

紅蓮の炎>「お？」

ヲ「ああ、コメント欄が盛り上がったのってAdmiralさんが居たからなんです  
すね」

提「よおレイン！やってるかあ！」バアン！

ヲ「ヲヲツ!!」

テトラ@白の十字架>「親フラ!？」

紅蓮の炎>「草」

麵屋#ラーメン>「草」

黒石柿>「草」

タケル@クオーツ>「草」

提「一緒にやろうぜ！」

ヲ「えっ…今？」

出来れば配信中はやめて欲しかったなあ…（遠い目）

提「いやもうチーム加入してる」

ヲ「……え？Admiral？」

提 「俺のアカウント」

バンギ> 「リア友マジ!？」

テトラ@白の十字架> 「え、え、え？」

Admiral> 「そう言う事やで」

麵屋#ラーメン> 「神展開k t k r」

刃牙さん> 「遂にritoに下克上か」

スイッチマン> 「熱すぎて笑つちやうんですよね」

冷蔵庫@赤騎士団> 「参加しますよろしくお願いします」

Admiral> 「よろ」

刃牙さん> 「折角だからAdmiral兄貴もつと喋って」

テトラ@白の十字架> 「コメントじゃ無くて話してほしいです／／?? ( , ω , ) ?

／／／

提 「だつてよ」

ヲ「ヲヲツ…配信枠乗っ取られた気がする…」

提 「よっしお前ら行くぞオオオオ！」

英二@31> 「兄貴の生声初めて聞いたわ」

刃牙さん> 「うおおおおおおお!!」

麵屋#ラーメン>「行くぞおおおおおお!!」

スイッチマン>「おおおおおお!!」

ジグ>「何で今日ランカーマッチしてんだww」

バンギ>「最高www」

いや!提督である彼がここまでのガチプレイヤーだとは思わなかった。

Admiral: ネットではAdmiral兄貴と呼ばれている中距離支援型バランス特化アバターのプレイヤー。

ランキング19位の彼は一切配信という物をした事がない。

中身がわかった今、何で配信しないのかなんて明白だが知らない世界中の人達はritの配信でもしくはチャット欄で会話する他無かった。

彼の生声は全世界初出であり、急上昇どころの騒ぎでは無くなってしまふ。

「FIRE of blust」全プレイヤーが彼に注目する事だろう。

「<バトルスタート>」

提「レイン左援護頼む!」

ヲ「わ、わかった」

いつも通りritは草薙と共に詰め寄ってくる。ベースと零海はいつもの様にスナイパー体制を取っているが零海のアビリティにワープを確認している、油断は出来な

い。

提「おらritto覚悟しやがれ！」

ヲ「はあ!?もう詰めるの!？」

Admiralがrittoに向かつて突撃する。冷蔵庫と私で援護に入ろうとするがベースの狙撃によって阻まれる。

ヲ「いやスナイプキャンセル上手いなッ…！」

提「問題ない。」

【ritto】&gt;【流石Admiralさんね】

Admiralがrittoに一撃ブチ込んだ、スモークを使わせる大戦果だ。

rittoは撤退、おそらくベースのアビリティで回復するつもりだろう。

提「チャット打てるうちは余裕の癖に良く言うぜ」

【Admiral】&gt;【いえいえ其方こそ（・▽・）】

連語&gt;【二人とも余裕ww】

テトラ@白の十字架&gt;【トップランカー怖い】

バンギ&gt;【配信主のレイン空気（）】

ゼスタ@無課金同盟&gt;【戦いながらチャットすんの憧れる】

ヲ「…ベースを叩きます」



提「了解、じゃあ俺はささつと草薨ちゃんを倒しますかねえつと！」

Admiralと草薨が交戦。お互いゴリゴリ体力が削れていくが手数が多いAdmiralの方が与ダメージは多い様だ。

そこを狙う零海に冷蔵庫がスナイプキャンセル、うまい。

なら私も活躍しなきゃ：ランカーの名が廃る！

提「ナイス！」

ヲ「よっし！」

ベースをヘッドショットで即死させた、これでリペアは貼れない：rittoは回復手段を失った！

零海だけでは私達を止められない筈だ！

提「俺も倒しました〜」

提「回復使うから援護よろしく」

ヲ「道のど真ん中で回復使うかな普通!?!」

草薨を倒したAdmiralが死角のない場所で回復キットを使用する。

いやせめて建物に隠れようよ：

提「grandニキナイスウ！」

ワープを使用して前線詰めをして来た零海をgrandが阻止する。

冷蔵庫が頭の出た隙を狙い狙撃、即死だ。

提「後はrittoだけだ。覚悟しろオオオオ！」

紅蓮の炎>「つえええええ!!」

テトラ@白の十字架>「勝てる勝てる！」

パラレル#極光@極騎士道「Admiralさんへ\*アイテムが贈られました+マジカル☆グレネードx5」

提「うわあおパラレルニキまじ感謝!それ欲しかったコラボアイテムじゃん!」

提「じゃあ頑張っちゃいますかあ、レインも前出て」

ヲ「え?マジ?」

提「一人なら砂2要らないよ。詰めて詰めて」

さて、逃げ場を失ったritto戦だ。

私はハンドガンだし援護くらいしか出来ないだろうが…こちらは誰一人書けるように事なくここまで来ている。

いや勝てるんじゃないのこれ!?

【Admiral>「お覚悟を」】

提「おっと、返事が返って来ない。本気かな?」

ヲ「…来ますよ!」

両手に持っていた二丁の銃を投げ捨て、ritoが取り出したのは赤いアサルトライフル……？

提「うわっ！ランカー装備使いやがったあの野郎！」

紅蓮の炎>「Rein carnationか」

タケル>「初めて見た」

提「あれ胴体二発即死だから注意しろよ」

ヲ「はああ!？」

紅蓮の炎>「うわ何それ」

テトラ@白の十字架>「ぶっ壊れ過ぎない？」

バンギ>「やり過ぎか」

刃牙さん>「アタッチメント不可だから火力特化ノースコスナイパーと変わらんぞ」

麵屋#ラーメン屋>「いやアサルトでそれはおかしいからな」

一発被弾、残り体力10!？」

防御降つてないからっておかしいって火力!!

grandの体力がゼロになる、ritoの機動力にバカ火力が合わさればそりゃ無

敵……

提「残念だったなああ！」

Admiralがrittoに特攻。体力が削れているAdmiralは一発食らっただけで即死：

だがAdmiralの死体からは赤いグレネードがritto目掛けて飛んでいく。

デッドグレネード、キルされた相手に追尾する爆弾。

ダメージ量こそ少ないが半分以上削れているrittoにとってそれは致命傷になるダメージで…！

ヲ「ritto倒したあああ!!」

提「完璧な作戦だった。」

rittoにぶつかり爆散。無事hpは0になり死亡。

ヲ「勝った勝った！やったあ！」

提「ああ、まだあそこの放置勢忘れてたわ」

白牙。この戦いの中、フラフラとスポン位置を彷徨っていたプレイヤー。

誰もがその存在を忘れていた。何にもして来なくて影が薄過ぎた。

ヲ「さっさと勝ちますか」

「緊急爆撃要請が受理されました」

ヲ「へ？」

テトラ@白の十字架>「あ」

紅蓮の炎>「あ」

ハイヒール0012>「あ」

クロノ>「あ」

ラーメン屋>「あーあ」

残り人数が四人以下で、使用プレイヤーがノーダメージ、ノーキルの場合発動できる初期装備。

残りプレイヤー全てにhpの99%ダメージを与えるそれはロマン装備、使い物にならないゴミとされ警戒するプレイヤーはもう居ない。

だから初心者装備にそれがある事を忘れていた。

ヲ「わああああああ!!」

<your dead>

<貴方のチームは敗北しました>

ヲ「ヲヲツ…」

提「ああ…あれ忘れてたわ」

完全敗北！醜態を晒した配信でした！

…提督の事はよく知れた気がする、多分ネ。

◆裏話

離島 「ああ負けたッ！」

離島 「本当あの人が強すぎるのよ……！」

離島 「てか空母棲姫さつきから動いて無いじゃない!? どうしたの!？」

空母 「操作わからない……」

離島 「……ああ忘れてたわ!! 十字キーで移……あれ? ソレって……」

離島 「Zボタンおしてくれる?」

空母 「これか?」 ポチッ

「<緊急爆撃要請が受理されました>」

離島 「いよっつしやあああああ!! 勝利いいいいいい!!」

空母 「!?」 ビクッ

離島 「流石ね空母棲姫……見直したわ」

空母 「何にも分からなかったんだけども」